目　次

第一講　演習問題(1)……p.2
第二講　演習問題(2)……p.10
第三講　演習問題(3)……p.16
第四講　演習問題(4)……p.24
第五講　演習問題(5)……p.30

第一講　演習問題(1)

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「X皇后宮（こうごうぐう）、Y上東門院（じょうとうもんいん）、いづれか今少しめでたくおはしましける」と言へば、「皇后宮、御みめもうつくしうおはしましけるとこそ。院も、いと御志深くおはしましける。失せさせ給ふとて、

A　知る人もなき別れ路に今はとて心細くも思ひ立つかな

B　夜もすがら契りしことを忘れずは恋ひむ涙の色ぞゆかしき

など詠ませ給ふらむこそ、あはれに侍れ。のちに御覧じけむ帝の御心地、まことにいかばかりかはあはれにおぼしめされけむ。

さて御Pわざの夜、雪の降りければ、

C　Q野辺までに心ひとつは通へども我がみゆきとは1知らずやあるらむ

と詠ませ給へりけむも、いとこそめでたけれ。おはしまさぬ後（あと）まで、さばかりの御身に、2御目も合はずおぼしめし明かしけむほどなども、返す返すもめでたし。

また中関白殿（なかのかんぱくどの）隠れさせ給ひ、また内大臣（うちのおとど）流されなどして、御世の中衰へさせ給ひてのち、かすかに心細くておはしましけるに、頭中将それがし参りて、簾（す）のそば、風に吹き上げたるより見給ひければ、いたく若き女房の清げなる、七八人ばかり、色々の単襲（ひとへがさね）、裳（も）、唐衣（からぎぬ）などもあざやかにてさぶらひけるも、いと思はずに、今は何ばかりをかしきこともあらじと[3]思ひあなづりけるも、あさましくおぼえけるに、[4]庭草は青く茂りわたりて侍りければ、『などかくは。これをこそ払はせておはしまさめ』と聞こえ給ひても、宰相の君となむ聞こえける人、『露置かせて御覧ぜむとて』といらへけむこそは、[5]なほ古（ふ）りがたくいみじくおぼえさせ給へ。

上東門院の御事は、よし悪（あ）しなど聞こゆべきにもあらず。何事もめでたきためしにはまづ引かれさせ給ふ時なれば、とかく申すに及ばず。何事も御幸ひ極めさせ給ふあまりに、御命さへこちたくて、あまたの帝におくれさせ給ふこそ、[6]口惜しく侍れ。そのたびに、いとあはれなる御歌ども詠ませ給ひたるは、やさしくこそ侍れ。

一条院隠れさせ給ひて、

逢ふことも今はなき寝（ね）の[7]夢ならでいつかは君をまたは見るべき

など詠ませ給へるも、いとめでたくこそ侍れ。

また、顕基（あきもと）の中納言の御返事（かへりごと）に『世は二度（ふたたび）はそむかざらまし』など侍るも、いとあはれなり。

何事よりも、優なる人多くさぶらひけむこそ、いとど心にくくめでたくおぼえ侍れ」と言へば、「その御妹（おとうと）の枇杷（びわ）殿の皇太后宮と聞こえさするにこそ、いと華やかに物好みしたる人々多くさぶらひけれ。大和宣旨（やまとせんじ）も、その宮の女房なるべし。折々の女房の装束、打出（うちいで）なども、ためしなきほどに制を破り、女房の一品経供養（いつぽんきようくよう）などしけることも、いとおびたたしく侍りけれ。

女院には、さばかり名を残したる人々さぶらひけれど、さやうのことなども、人の目驚くばかりはあらじ、とつつませ給ひけむほど、さまざま心の色々見えて、めでたくこそ侍れ。」

（『無名草子』）

〈注〉

○皇后宮…藤原道隆の娘、定子のこと。一条天皇皇后。

○上東門院…藤原道長の娘、彰子のこと。女院も同じ。一条天皇中宮。

○院…一条天皇のこと。一条院も同じ。

○帝の御心地…帝は一条天皇のこと。
○中関白殿…藤原道隆。
○内大臣…藤原伊周（これちか）。定子の兄。
○宰相の君…定子に仕える侍女。
○『世は二度はそむかざらまし』…源顕基の歌に対する彰子の返歌「ときの間も恋しきことの慰まば世は二度も背かざらまし」を指す。
○その御妹の枇杷殿の皇太后宮…藤原道長の次女で彰子の妹、妍子。三条天皇中宮。
○打出…牛車や建物の簾の下から、衣の一部をわざと出すこと。出し衣（いだしぎぬ）。
○一品経供養…『法華経』を一品ずつ各人が書写し、供養すること。

問一　和歌A・Bの作者は誰か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　定子
b　彰子
c　一条天皇
d　『無名草子』の作者

問二　二重傍線部Ｐ「わざ」、Ｑ「野辺」の意味として、正しい組み合わせのものを次の中から一つ選べ。

ａ「わざ」…出家　　「野辺」…庵（いおり）を結ぶ場所
ｂ「わざ」…退出　　「野辺」…実家に帰る道中
ｃ「わざ」…葬送　　「野辺」…火葬が行われる地
ｄ「わざ」…門出　　「野辺」…旅人を見送る所

問三　和歌Ｃの説明として正しいものを次の中から一つ選べ。

ａ　定子を思って一条天皇が野辺を訪れたことは、きっと誰も知らないだろうという意味の歌である。
ｂ　自ら訪れることは出来なくても、その心だけはついて行っていることを詠んだ一条天皇の歌である。
ｃ　雪が降っているのを、これは一条天皇が訪れてくれたのだと思って、なつかしんでいる定子の歌である。
ｄ　定子の思いが雪となって一条天皇のもとに降りそそぐのを人々に知ってほしいという意味の歌である。

問四　傍線部１「知らずやあるらむ」を現代語訳せよ。

問五　傍線部２「御目も合はず」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ａ　相手を御覧になることもできず
ｂ　正気を失われて
ｃ　お眠りにもなれず
ｄ　涙があふれなさって

問六　傍線部３「思ひあなづりける」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ａ　「頭中将それがし」は、定子が、身内を失って悲しみに沈んでいるはずの時であるのに、若い女房たちを集めてきらびやかに暮らしているのを軽蔑していた。
ｂ　「頭中将それがし」は、時勢が変わってしまったので、定子の所を訪ねても、何も興味深い話を聞くことはできないだろうと、軽く見ていた。
ｃ　「頭中将それがし」は、頼りとする父や兄を失ってしまった定子のもとには、心もとない若い女房しかいないだろうとあなどっていた。
ｄ　「頭中将それがし」は、定子の暮らしを、一家の勢力がすっかり衰えたので、何も優雅なことはないだろうと見下していた。

問七　傍線部４「庭草は青く茂りわたりて侍りければ」、５「なほ古りがたくいみじく」について、次の問に答えよ。

Ⅰ　庭草が茂っていることに対して、定子側はどのように説明しているのか。説明せよ。

Ⅱ　Ⅰのように定子側が強弁したのを、『無名草子』で、「なほ古りがたくいみじく」と評価したのはなぜか。説明せよ。

問八　傍線部６「口惜しく侍れ」とあるが、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　彰子は、女性としての幸福を極めるあまり、命ははかなくて、その短命を何代もの天皇が悲しんだから。
b　彰子は、幸いを極めるあまり寿命が長くなく、何代もの天皇の行く末を見届けられずに、亡くなってしまったから。
c　彰子は、幸いを極めるあまり、夫まで長寿であったために、二人で後の何代もの天皇を見送らなければならなかったから。
d　彰子は、何事にもこの上ない幸いを持っていたあまりに、寿命まで長く、そのため何代もの天皇に先立たれてしまったから。

問九　傍線部7「夢ならでいつかは君をまたは見るべき」を現代語訳せよ。

問十　波線部X「皇后宮」、Y「上東門院」について、本文中ではこの二人をどのように評価しているか。次の中から適切なものを、X、Yそれぞれにつき二つずつ選べ。

a　天皇が亡くなるたびに、とても心打たれるような和歌を詠むなど、和歌の才能が抜きん出ていた。
b　亡くなった後も一条天皇に深い悲しみを抱かせるなど、一条天皇にこの上もなく深く愛された。
c　すばらしい人の例として、真っ先に挙げられる人で、すばらしいかどうかは議論するまでもない。
d　逆境にもめげず、常に情趣あるさまを保ち、風流を好み気高く生きた。
e　多くのすぐれた女房がお仕えしているのに、衣装や催し事など様々について、華美にはせず慎み深くあろうとした。
f　他の后たちに負けず、自ら様々に趣向を凝らし、仕えている女房達にも気を配って一条天皇の時代をもり立てた。

第二講　演習問題(2)

次の文章は『発心集』の一話である。これを読んで、後の問いに答えよ。

美作守顕能（みまさかのかみあきよし）のもとに、なまめきたる僧の、入り来たつて経をよにたふとく読むあり。主（あるじ）聞いて、「何わざし給ふ人ぞ」と云（い）ふ。近く寄つて云ふやう、「乞食（こつじき）に侍り。但し、家ごとに物乞ひありくわざをば仕（つか）うまつらず。西山なる寺に住み侍るが、いささか望み申すべき事ありてなむ」と云ふ。物ざま、むげに思ひ下すべき（ィ）にはあらざりければ、こまやかに尋ね問ふ。「申すに付けて、いと異様（ことやう）には侍れど、ある所のなま女房を相ひ語らひて、物すがせなんどし侍り［A］程に、はからざるほかに、1ただならずなりて、此（こ）の月にまかり当りて侍るを、『偏（ひとへ）に我があやまちなれば、2殊更（ことさら）こもりゐて侍らむ程、彼が命つぐばかりの物あたへ侍らばや』と思ひ給ふるが、いかにもいかにも、力及び侍らねば、もし、御あはれみや侍るとてなむ」と云ふ。事の起りは、げにと覚えずなれど、「3さこそ思ふらめ」といとほしく覚えて、「いとやすき事にこそ」とて、おしはからひて、人一人（いちにん）に持たせて、そへて取らせんとす。此の僧の云ふやう、「4かたがたきはめてつつましく侍り。殊更そことは知られじと思ひ給ふるなり。自ら持ちてまからん」とて、持たるるほど負うて出でぬ。

主、なほあやしく思ひて、左様（さやう）のかたに意得（こころえ）たる者一人を付けてやる。様をやつして、見かくれに行きける程に、北山の奥にはるばると分け入りて、人も通はぬ深谷に入り〔ロ〕にけり。一間ばかりなるあやしき柴の庵（いほり）の内に入りて、物うち並べて、「あな苦し。（注）三宝の助けなれば、（注）安居（あんご）の食（じき）もまうけたり」と独りうち云うて、足うち洗ひてしづまりぬ。此の使ひ、「いとめづらか〔ハ〕にもあるかな」と聞きけり。日暮れて、こよひ帰るべくもあらねば、木陰にやはら隠れゐ〔ニ〕にけり。夜ふくる程に、法華経を夜もすがら読み奉る声、いとたふとくて、泪（なみだ）もとどまらず。明くるやおそしと立ち帰りて、主に、ありつる様を聞こえければ、驚きながら、「さればよ、ただ者にはあらずと見［B］」とて、重ねて消息をやる。「思ひかけず、安居の御料と承る。しかあらば、一日（ひとひ）の物は少なくこそ侍らめ。此れを奉る。なほも入らむ事候はば、必ずのたまはせよ」と云はせたりければ、経うち読みて、何とも返事云はざりけり。とばかり待ちかねて、物をば庵の前に取り並べて帰りぬ。日来（ひごろ）経て、「さても、ありつる僧こそ不審なり［C］」とて、おとづれたりけれど、其（そ）の庵には人も無くて、前に得たりし物をば、外へ持ちい〔ホ〕にけるとおぼしくて、後の贈り物をば、さながら置きたりければ、鳥・けだもの食ひ散らしたるやうにて、ここかしこにこぼれ散りてぞあり［D］。

実（まこと）に道心ある人は、かく、我が身の徳を隠さむと、5過（とが）をあらはして、貴まれん事を恐るるなり。もし、人、世を遁（のが）れたれども、6いみじくそむけりと云はれん、貴く行ふよしを聞かれんと思へば、世俗の名聞（みやうもん）よりも甚し。此の故に、ある経に、「出世の名聞は、譬（たと）へば、血を以て血を洗ふが如し」と説けり。本の血は洗はれて、落ちもやすらん、知らず。今の血は、大きにけがす。愚かなるにあらずや。

（注）三宝…仏法僧の三種の宝。
安居…夏の九十日間、特定の場所に籠もって行う仏道修行。

問一　二重傍線部イ～ホの「に」の中から完了の助動詞を二つ選べ。

問二 傍線部1「ただならずなりて」とは具体的にどのようなことか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ 女が身ごもったこと。
ロ 女が病気にかかったこと。
ハ 自分が官職を追われたこと。
ニ 自分が出家の身になったこと。
ホ 自分の修行の時期が近づいたこと。

問三 傍線部2「殊更(ことさら)こもりゐて侍らむ程、彼が命つぐばかりの物あたへ侍らばや」の意味として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ 彼が謹慎していた間も、せめて食事くらいは与えてやりたかった。
ロ 彼女がひきこもっている間くらい、私の食事の世話をしてもらいたい。
ハ 彼女が出産のために外出できない間だけでも、彼女に食事を与えたい。
ニ 私が世間を遁れていた間も、彼女の食事の心配だけはしてあげたかった。
ホ 私が修行のために庵に籠もった時には、どうか食事だけでも与えてほしい。

問四 傍線部3「さこそ思ふらめ」には、僧に対する主のどのような気持ちが込められているか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ 共感　　ロ 尊敬　　ハ 軽蔑　　ニ 称賛　　ホ 同情

問五　傍線部4「かたがたきはめてつつましく侍り」とあるが、僧がこのように言った真意はなにか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　女との生活を邪魔されたくなかったから。
ロ　厳しい修行を人に誉められたくなかったから。
ハ　ただの物乞いであると思われたくなかったから。
ニ　あまりに粗末な住家を見られたくなかったから。
ホ　生活の糧を得るための嘘を見破られたくなかったから。

問六　空欄［A］〜［D］には過去（回想）の助動詞「き」か「けり」が入る。空欄に入る語の組み合わせとして、最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　A　ける　　B　き　　C　しか　　D　き
ロ　A　ける　　B　けれ　　C　ける　　D　し
ハ　A　ける　　B　けり　　C　し　　D　しか
ニ　A　し　　B　き　　C　けれ　　D　ける
ホ　A　し　　B　けれ　　C　けれ　　D　ける

問七　傍線部5「過をあらはして」とあるが、この僧の場合、具体的にはどのようなことか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　出家したにもかかわらず世の名声を望むこと。
ロ　嘘をついてまで人から物を得ようとすること。
ハ　人の好意をあえて踏みにじる行為をすること。
ニ　仏道修行の途中でも時おり世間に交わること。
ホ　僧の身で女性と関係を結んだなどと語ること。

問八　傍線部6「いみじくそむけり」とあるが、「そむく」とはどのような意味か。本文中から同じ意味の熟語（漢字二字）を抜き出して記せ。

問九　本文の内容に合うものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　僧を立派な修行者だと見込んでいた主の期待は、みごとに裏切られた。
ロ　主は僧のとった行動を通して、本当の道心とは何かを初めて理解した。
ハ　僧の修行は、結局は貧しい生活から逃れるための口実でしかなかった。
ニ　僧は自らを極限に追い込むために、敢えて主からの施しを無駄にした。
ホ　真の出家者を志した僧は、自分が愚か者だと思われるように振舞った。

第三講　演習問題(3)

次の甲・乙を読んで、後の問いに答えよ。

甲〔左は、平安末期の貴族、藤原実家の家集（個人歌集）の一部である。なお、途中に省略した部分、手直しをした箇所がある。
↑注：入試問題そのままです〕

兵衛殿の集を、あながちに「見む」と言へば、「さらば」などはありて、なほ程の経れば、尋ねにやるとて。詞は無くて、頃は［A］なり。

さくら花　うかぶ水際（みぎは）の　しら波は　たちて日数（ひかず）を　経たるとぞ見る　（和歌Ⅰ）

かへりごと。

さくら花　うかぶ流れは　しろたへに　水に消えせず　よする波かな　（和歌Ⅱ）

かくて、草子(さうし)は加へられたり。

「B宮内の少輔伊行(せうこれゆき)といひし者、手書くべきありさまを草子に書きて、それをば夜の鶴と名付けて、C女(むすめ)なる者に取らせ置きて身まかりにき」と大宮の加賀が語りしかば、尋ね取りて見て、程の経しを、乞ふとて。これも春のことなり。

加賀

出でて見よ　まれに咲き出づる　花の色の　たち隠れつつ　へだて行くめる　（和歌Ⅲ）

沓冠(くつかぶり)といふことにて、たはぶれたりけるなめり。

花のころ、俊恵法師がもとより。

春の花　惜(を)しみてはまた　つつみかね　手ごとにさのみ　はては折らめや　（和歌Ⅳ）

かへりごと。

今はただ　咲く花ぞ待つ　寝こそ寝ね　聞くだに惜しみ　手も触れで見む

（和歌Ｖ）

かく言ひたりしかば、すなはち俊恵法師出で来て、ものなど言ふついでに、「故木工の頭の歌に、『はかなしな　小野の小山田　作りかね　手をだにも君　はては触れずや』（和歌Ⅵ）、かく言ひたりければ、かへしをばせで、故東宮の大夫、使につきて、『いざ、さは、花見に』とありしこそ、昔の広幡の御息所の、薫き物奉られたりけむ心地して、をかしうはべりしとこそ、常にD語りはべりしか。家の集にも書き留めたり」など語るは、Eかへしはすまじきと思ひけるなめり。などてか、必ず同じ様ならむや。

乙　〔左は、甲に言及される広幡の御息所の逸話を述べた、源俊頼著の歌学書『俊頼髄脳』中の一節である。〕

「あはせ薫き物すこし」といへる事を据ゑたる歌。

あふさかも　はては行ききの　関もゐず　たづねてこばこ　きなばかへさじ（和歌Ⅶ）

これは、仁和の帝の、方々に奉らせ給ひたりけるに、みな心も得ず、かへしどもを奉らせ給ひたりけるに、広幡の御息所と申しける人の、御かへしは無くて、薫き物を奉らせたりければ、心あることにぞ思しめしたりけると語り伝へたる。

注　兵衛殿の集…当時、著名な女房歌人であった、上西門院兵衛の個人歌集のこと。
沓冠…各句の頭（冠）と末尾（沓）をたどると、そこに語句や文が隠されている和歌。たどる順序にはいくつか種類がある。
故木工の頭…俊恵の父、源俊頼のこと。
故東宮の大夫…藤原公実のこと。藤原実家の曽祖父にあたる。

問一　空欄［A］には、陰暦で示せばどのような時節を表す言葉が入るのが最も適当か。次の中から選べ。

イ　正月中旬　　ロ　二月上旬　　ハ　三月下旬
ニ　四月中旬　　ホ　五月上旬

問二　和歌Ⅰ・Ⅱの句の頭を順にたどると、それぞれ「草子給べ（さうしたべ）」（和歌Ⅰ）、「草子見よ（さうしみよ）」（和歌Ⅱ）のメッセージを読み取ることができる。このような和歌の技法は何と呼ばれるか。次の中から選べ。

イ　挙句　　ロ　折句　　ハ　発句　　ニ　麗句　　ホ　連句

問三 傍線部Ｂ「宮内の少輔伊行」は、現存する最古の『源氏物語』注釈書である『源氏釈』を著した人物として知られるが、その女（むすめ）の一人は、高倉天皇の中宮に仕え、平家の公達の一人と恋愛し、後には後鳥羽天皇にも仕えた女房歌人であった。この歌人として著名な伊行の女の名を次の中から選べ。

イ 阿仏尼　ロ 和泉式部　ハ 右京大夫
ニ 讃岐典侍　ホ 六条御息所

問四 傍線部Ｃに見出される助動詞と同じ助動詞を含むものを、次の中から一つ選べ。

イ あやしうこそもの狂ほしけれ
ロ 男もすなる日記といふもの
ハ 我もしかなみだを添ふる
ニ たまのひかりも添はざらん
ホ 夢と知りせば覚めざらましを

問五 和歌Ⅲ～Ⅶはすべて沓冠であり、ⅣとⅥには全く同一の文が隠されている。それは、Ⅲ、Ⅴ、Ⅶとは異なって、第一句の句頭→句末→第二句の句頭→句末…とたどっていく形式になっている。Ⅳ・Ⅵに隠されている文を、すべて平仮名で、かつ必要な箇所に正しく濁点を付けて記せ。なお、文末に句点を付ける必要は無い。

問六　傍線部Ｄの動詞の主語は誰か。次の中から選べ。

イ　藤原実家　　ロ　俊恵法師　　ハ　故木工の頭
ニ　故東宮の大夫　　ホ　広幡の御息所

問七　傍線部Ｅ・Ｆの意味として最も適当なものを、それぞれ次の中から選べ。

Ｅ
イ　花見の返礼をする必要はないと当然私は判断したのである。
ロ　返信すること自体失礼だと故東宮の大夫は思ったらしい。
ハ　薫き物を奉るはずはないと故木工の頭は考えたという。
ニ　和歌を返すべきではないと俊恵は思っていたようだ。

Ｆ
イ　来るのは構わない。しかし、来ても何もあげられないよ。
ロ　やって来るなら来なさい。もし来たらあなたを帰さないよ。
ハ　自分から訪ねてくれることを望む。私の方からは行けないよ。
ニ　問い合わせてくれることは嬉しい。けれども返事はできないよ。

問八 次の中から甲または乙の内容と合致するものを一つ選べ。

イ 兵衛は実家の申し出を受けながら、わざとじらせてその気を引いたのであった。
ロ 伊行が女のために著し残したという書道の本を、実家はぜひ読みたいと思った。
ハ 俊恵の誘いに実家は、残念ながら桜を見に出かけるのは難しい、と返事をした。
ニ 俊恵の父俊頼と実家の曽祖父公実は相談して、子孫のために歌の手本を残した。
ホ 広幡の御息所は、香の調合の方法を知っていたため、帝の愛情を一身に受けた。

第四講　演習問題(4)

次の文章は『源氏物語』の一節である。鬚黒大将は光源氏の養女である玉鬘に通い始め、鬚黒大将の北の方はそれを悲しんでいる。これは鬚黒大将がこれから玉鬘のもとへ行こうとしている場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

暮れぬれば、心も空に浮きたちて、いかで出でなんと思ほすに、雪かきたれて降る。かかる空にふり出でむも、人目いとほしう、この御気色も、憎げにふすべ恨みなどし給はば、なかなかことつけて、我もむかへ火つくりてあるべきを、[1]いとおいらかにつれなうもてなしたまへるさまの、いと心苦しければ、いかにせむと思ひ乱れつつ、格子などもさながら、端近ううちながめてゐたまへり。北の方気色を見て、「あやにくなめる雪を、いかで分け給はんとすらむ。夜も更けぬめりや」とそそのかし給ふ。今は限り、とどむともと思ひめぐらし給へる気色、いとあはれなり。「[2]かかるには、いかでか」とのたまふものから、「なほこのころばかり。心のほどを知らで、とかく人の言ひなし、大臣たちも左右に聞き思さんことをはばかりてなん、とだえあらむはいとほしき。思ひしづめてなほ見はて給へ。ここになど渡しては、心やすくはべりなむ。かく世の常なる御気色見えたまふ時は、外ざまに分くる心も失せて　A　、あはれに思ひきこゆる」など語らひたまへば、「立

ちとまりたまひても、御心の外ならんは、なかなか苦しうこそあるべけれ。[3]よそにても、思ひだにおこせたまはば、袖の氷もとけなんかし」など、なごやかに言ひゐたまへり。

御火取（注1）召して、いよいよ[a]たきしめさせたてまつりたまふ。みづからは、なえたる御衣どもに、うちとけたる御姿、いとど細うか弱げなり。しめりておはする、いと心苦し。御目のいたう泣き腫れたるぞ、少しものしけれど、いとあはれと見る時は、罪なう思して、いかで過ぐしつる年月ぞと、なごりなううつろふ心のいと軽きぞやとは[b]思ふ思ふ、なほ心げさうは進みて、そら嘆きをうちしつつ、なほ装束したまひて、小さき火取とり寄せて、袖にひき入れてしめゐたまへり。

侍所に人々声して、「雪少し隙あり。夜は更けぬらんかし」など、さすがにまほにはあらで、そそのかし[4]きこえて、声づくりあへり。中将、木工（注2）など、「あはれの世や」などうち嘆きつつ、語らひて臥したるに、正身はいみじう[c]思ひしづめて、らうたげに寄り臥したまへり、と見るほどに、にはかに起き上がりて、大きなる籠の下なりつる火取をとり寄せて、殿のうしろに寄りて、さといかけたまふほど、人のやや見あふるほどもなう、あさましきに、あきれて[d]ものしたまふ。さるこまかなる灰の、目鼻にも入りて、おぼほれてものもおぼえず。払ひ捨てたまへど、立ち満ちたれば、御衣ども脱ぎたま

ひつ。うつし心にてかくしたまふぞと思はば、またかへり見すべくもあらずあさましけれど、例の御物の怪の、人にうとませむとする事と、御前なる人々も［B］見たてまつる。立ち騒ぎて、御衣ども奉り換へなどすれど、そこらの灰の、鬢（びん）のわたりにも立ちのぼり、よろづの所に満ちたる心地すれば、きよらを尽したまふわたりに、さながら[e]まうで給ふべきにもあらず。心違ひとは言ひながら、なほめづらしう見知らぬ人の御有様なりやと爪はじきせられ、うとましうなりて、あはれと思ひつる心も残らねど、このころ荒だてては、いみじきこと出で来なむと思ししづめて、夜半になりぬれど、僧など召して加持まゐり騒ぐ。

（注１）　御火取…衣服に香をたきしめるための香炉。

（注２）　中将、木工…女房たちの名。

問一　傍線部１「いとおいらかにつれなうもてなしたまへるさまの、いと心苦しければ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア…とてものんびりして気にしないふうで、誠に愛くるしいご様子なので
イ…とても大人びて薄情なご様子が、大変心にかかって苦しく思われるので
ウ…非常に老成していてさりげない返答のご様子が、とてもつらく思われるので
エ…大変おっとりと平静にしていらっしゃるご様子が、誠に不憫に思われるので
オ…誠に平静で無表情なご様子で、こちらのほうがひどく気を遣ってしまうので

問二　傍線部２「かかるには、いかでか」は誰の言葉か。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア…鬚黒大将　　イ…北の方　　ウ…大臣たち
エ…玉鬘　　オ…女房たち

問三　空欄Ａに入る最も適切な語句を、次の中から一つ選べ。

ア…なほ　　イ…やは　　ウ…だに　　エ…なん　　オ…こそ

問四　傍線部３「よそにても、思ひだにおこせたまはば、袖の氷もとけなんかし」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア…離れた世界にいても、お互いに夫婦の愛情さえあれば、このように嘆くこともなくなることでしょう。
イ…離れていても、あなたが子供達のことさえ心配してくださるなら、私が嘆いて流す袖の涙の氷もとけるでしょう。
ウ…あなたのことをよその方が思っていらっしゃるのならば、あなたが嘆いて流す袖の涙の氷もとけることでしょうね。
エ…あなたがよそながらでも、玉鬘のことさえ大切に思っておられるなら、玉鬘が嘆いている袖の涙の氷もとけるに違いありません。
オ…あなたがよそにいらっしゃっても、せめて私のことを思い出してくださるなら、私が嘆いて流す袖の涙の氷もとけることでしょう。

問五　傍線部ａ～ｅの主語はそれぞれ誰か。主語の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア…ａ　北の方　　ｂ　鬚黒大将　　ｃ　女房たち　　ｄ　北の方　　ｅ　鬚黒大将
イ…ａ　鬚黒大将　　ｂ　北の方　　ｃ　鬚黒大将　　ｄ　女房たち　　ｅ　北の方
ウ…ａ　北の方　　ｂ　女房たち　　ｃ　鬚黒大将　　ｄ　北の方　　ｅ　鬚黒大将
エ…ａ　鬚黒大将　　ｂ　女房たち　　ｃ　鬚黒大将　　ｄ　鬚黒大将　　ｅ　北の方
オ…ａ　北の方　　ｂ　鬚黒大将　　ｃ　北の方　　ｄ　鬚黒大将　　ｅ　鬚黒大将

問六 傍線部4「きこえ」は、誰への敬意をあらわす語か。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア…鬚黒大将　イ…北の方　ウ…大臣たち
エ…玉鬘　オ…人々

問七 空欄Bに入る最も適切な語句を、次の中から一つ選べ。

ア…あさましう　イ…いとほしう　ウ…うとましう
エ…なごりなう　オ…つれなう

問八 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選べ。

ア…鬚黒大将は雪がひどいので、玉鬘のもとに出かけるかどうかを迷っていた。
イ…北の方は鬚黒大将の裏切りを非難し、怒りのあまり灰を鬚黒大将に浴びせた。
ウ…北の方の女房たちは、失敗したふりをして火取りの灰を鬚黒大将に浴びせた。
エ…北の方は物の怪のせいで感情を抑えられなくなり、常軌を逸する行動に出た。
オ…鬚黒大将は、北の方が物の怪のふりをして灰を浴びせたのではないかと疑った。

第五講　演習問題(5)

次の文章は『増鏡』の序文である。よく読んで、後の問いに答えよ。

二月の中の五日は、[注①]鶴の林に薪(たきぎ)尽きにし日なれば、[注②]かの如来二伝の御かたみのむつましさに、嵯峨の清涼寺に詣でて、「常在[注③]霊鷲山」など、心の中にとなへて[1]拝み奉る。かたはらに、八十にもや余りぬらむと見ゆる尼ひとり、鳩の杖にかかりて参れり。とばかりありて、「たけく思ひたちつれど、いと腰痛くて堪へがたし。こよひはこの局にうちやすみ[a]なむ。坊へ行きてみあかしの事などいへ」とて、具したる若き女房の、つきづきしき程なるをば[2]返しぬめり。「釈迦牟尼仏」とたびたび[3]申して、夕日の花やかにさし入りたるをうち見やりて、「あはれにも山の端近くかたぶきぬめる日影かな。我が身の上の心地こそすれ」とて、[4]寄りゐたる気色、何となくなまめかしく、心あらむかしと見ゆれば、近く寄りて、「いづくより詣で給へるぞ。ありつる人の帰り来ん程、[5]御伽せむはいかが」などいへば、「このあたり近く侍れど、年のつもりにや、いと遥けき心地し侍る。あはれに[b]なむ」といふ。「さても、いくつにかなり給ふらむ」と問へば、「いさ、よくも我ながら思ひ給へわかれぬ程に[c]なむ。百年にもこよなく余り侍りぬらむ。来し方行く先、ためしもありがたかりし

世のさわぎにも、この御寺ばかりつつがなくおはします。なほやんごとなき如来の御光なりかし」などいふも、古代にみやびかなり。年の程など聞くも、めづらしき心地して、かかる人こそ昔物語もすなれと、思ひ出でられて、まめやかに語らひつつ、「昔の事の聞かまほしきままに、年のつもりたらむ人［Ⅰ］と思ひ給ふるに、嬉しきわざかな。少しのたまはせよ。おのづから古き歌など書き置きたる物の片はし見るだに、その世にあへる心地すかし」といへば、すげみたる口うちほほゑみて、「[6]いかでか聞えむ。若かりし世に見聞き侍りし事は、ここらの年ごろに、［Ⅱ］夢ばかりだになくおぼほれて、何のわきまへか侍らむ」とはいひながら、けしうはあらず、[7]あへなむと思へるけしきなれば、いよいよいひはやして、「かの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の詞をこそ、仮名の日本紀にはすめれ。またかの世継が孫とかいひし、つくも髪の物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、御有様のやうなる人にこそありけめ。なほのたまへ」などすかせば、さは心得べかめれど、いよいよ口すげみがちにて、「そのかみは人の齢も高く、機も［Ⅲ］ば、それにしたがひて、魂も明らかにてや、しか聞えつくしけむ。あさましき身は、いたづらなる年のみつもれるばかりにて、昨日今日といふばかりの事だに、目も耳もおぼろになりにて侍れば、ましていとあやしきひがごとどもにこそは侍らめ。そもさやうに御覧じ集めけるふるごとどもはい

かにぞ」といふ。

「ただおろおろ見及びしものどもは、水鏡といふにや。神武天皇の御代より、いとあららかにしるせり。その次には大鏡。文徳のいにしへより、後一条の御門まで侍りしにや。また[8]世継とか四十帖の草子にて、延喜より堀河の先帝まですこしこまやかなる。またなにがしの大臣の書き給へると聞き侍りし今鏡に、後一条より高倉の院までありしなめり。まことや、いや世継は、隆信朝臣の、後鳥羽の院の御位の程までをしるしたるとぞ見え侍りし。その後の事[d]なむ、おぼつかなくなりにける。覚え給ふらむ所々までものたまへ。こよひは誰も御伽せん。かかる人にあひ奉れるも、しかるべき御契りあらむものぞ」と語らへば、「そのかみの事はいみじうたどたどしけれど、まことに事の続きを聞えざらんもおぼつかなかるべければ、たえだえに少し[e]なむ。ひがごとぞ多からんかし。そはさし直し給へ。いと［Ⅳ］わざにも侍るべきかな。かの古ごとどもには、なぞらへ給ふまじう[f]なむ」とて、

[9]おろかなる心や見えむます鏡古き姿にたちは及ばで

と、わななかし出でたるもにくからず、いと古代なり。「さらば、いまのたまはむ事をもまた書きしるして、かの昔の面影

にひとしからむとこそはおぼすめれ」といらへて、

　今もまた昔をかけばます鏡ふりぬる代々の跡にかさねむ

注①　鶴の林に薪尽きにし日…釈迦が娑羅双樹の木の下で入滅し、荼毘(だび)にふされた日。
注②　かの如来二伝の御かたみ…インドから中国、日本へと渡った、生身の釈迦の姿を写したとされる清涼寺の本尊。
注③　霊鷲山…釈迦が説法をしたという中インド、マガダ国の山。

問一　傍線部１「拝み奉る」、２「返しぬめり」、３「申して」、４「寄りゐたる」、５「御伽せむ」のそれぞれの主語は誰か。その組み合わせとして正しいものを、次のア〜オの中から一つ選べ。

ア	１　語り手	２　尼	３　尼	４　尼	５　語り手
イ	１　語り手	２　女房	３　女房	４　女房	５　尼
ウ	１　尼	２　女房	３　女房	４　尼	５　語り手
エ	１　尼	２　尼	３　女房	４　女房	５　語り手
オ	１　女房	２　女房	３　語り手	４　尼	５　女房

問二 傍線部a～fの「なむ」の中で、文法上ほかと異なるものを一つ選べ。

問三 空欄 I に入る語として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選べ。

ア かし　イ さへ　ウ ばや　エ もがな　オ にしがな

問四 傍線部6「いかでか聞えむ」の解釈として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選べ。

ア なんとかしてお聞きしたいものです。
イ どうやってお聞きすればいいでしょう。
ウ どうしてそのようにお聞きになったのですか。
エ どうしてお話し申し上げることができましょう。
オ どうしてお話し申し上げられないことがありましょう。

問五　空欄 Ⅱ には「夢」の枕詞が入る。次のア〜オの中から一つ選べ。

ア　あしひきの　　イ　うつせみの　　ウ　ぬばたまの
エ　くさまくら　　オ　ちはやぶる

問六　傍線部7「あへなむと思へるけしきなれば」の解釈として最も適切なものを、次のア〜オの中から一つ選べ。

ア　面倒なことだと思っているようすなので
イ　話してもよかろうと思っているようすなので
ウ　会えてうれしいと喜んでいるようすなので
エ　無理に話しても仕方がないと思っているようすなので
オ　ずいぶん昔のことだと不安に思っているようすなので

問七　傍線部8「世継とか四十帖の草子」は一般には何と称されている作品か。その作品名を漢字（楷書）で記せ。

問八　空欄 Ⅲ には、形容詞「強し」に助動詞「けり」が接続した語句が入る。その二語を空欄 Ⅲ に入るように活用させて記せ。

問九　空欄 Ⅳ に入る語として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選べ。

ア　うるさき
イ　たふとき
ウ　たへがたき
エ　めづらしき
オ　かたはらいたき

問十　傍線部９「おろかなる心や見えむます鏡古き姿にたちは及ばで」の歌の解釈として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選べ。

ア　これから話す物語を聞けば、昔の人に及ばない今の人々の愚かな心がよく澄んだ鏡に映るように見えることでしょう。
イ　これから話す物語は古い物語には及びもつかないもので、よく澄んだ鏡にものが映るように私の愚かな心が見えてしまうことでしょう。
ウ　これから話す物語を聞けば、人がいかに愚かであるかがよく澄んだ鏡に映るように古い物語にも増してはっきりとわかることでしょう。
エ　これから話す物語は古い物語には及びもつかないものですが、昔に及ばない今の世の姿は、よく澄んだ鏡に映るようにはっきりとわかることでしょう。
オ　これから話す物語を聞けば、私の心が昔とはすっかり変わって愚かになってしまったことが、よく澄んだ鏡にものが映るようにはっきりとわかることでしょう。

模範解答

第一講　演習問題(1)

〈模範解答〉

問一　a　**問二**　c　**問三**　b
問四　（亡き皇后は）わからないでいるだろうか
問五　c　**問六**　d
問七　Ⅰ　茂った庭の草にわざと露を置かせて、風情を観賞するためと説明している。
Ⅱ　没落して逆境の状態の中で、昔と同じように風流心を忘れずに気高く生きていることに感動したから。
問八　d
問九　夢ではなく、（現実に）いつあなたにまた逢えるでしょうか、いや、お逢いすることはできません。
問十　X　b・d　Y　c・e

〈現代語訳〉

「皇后宮定子と上東門院彰子と、どちらがいっそうすばらしくいらっしゃったか」と言うと、「皇后宮は、ご容貌も美しくいらっしゃったという。院（＝一条天皇）も、たいそうご愛情が深くていらっしゃった。お亡くなりになる時に（定子が）、

知る人も……＝誰も知る人もいないあの世へ別れて行く旅路に、もうこれで（お別れです）と、心細くも決心することよ。

夜もすがら……＝一晩中愛を誓ったことを忘れないならば、（死んだ私を）恋い慕って流す涙の色（が悲しみの血の涙であるか）を見たい。

などと詠みなさっていることは、しみじみとします。後に（この歌を）ご覧になった一条天皇のお気持ちは、本当にどれほどしみじみとお思いになったことでしょうか。

さて、（定子の）御送葬の夜、雪が降ったので、

　野辺までに……＝火葬が行われる野辺まで、心だけはついて行くのだが、これが行幸とは（亡き皇后は）わからないでいるだろうか。

と詠みなさったということも、たいそうすばらしい。お亡くなりになった後まで、あれほどの（高貴な）御身で、お眠りになれず（定子のことを）お思いになって夜を明かしたということなども、本当にすばらしい。

また、（定子の父である）中関白殿〔＝藤原道隆〕がお亡くなりになり、また（定子の兄の）内大臣〔＝藤原伊周〕が流罪になりなどして、ご一家の勢力がすっかり衰えてしまわれた後、ひっそりと心細くていらっしゃった時に、頭中将某が参上して、簾の近くで、風が吹き上げたところから（中を）見なさったところ、ひどく若い女房で美しい女房が、七、八人ほど、色とりどりの単襲や、裳、唐衣なども鮮やかなのを着てお仕えしていたのも、たいそう意外で、「今はどれほど趣深いこともないだろう」と見下していたのも、驚きあきれたことに思われたが、庭草は青く一面に茂っていましたので、『どうしてこのように（しておくのか）。この草を刈らせていらっしゃるのがよい』と申し上げなさっても、宰相の君と申し上げた（定子の）侍女が、『（定子様が）露を置かせてご覧になろうとなさって（わざと草を刈らないのです）』と答えたということは、やはり（没落して逆境の境遇でも）昔と変わらず（風流心を忘れず気高く生きていることが）すばらしく思われなさる。

　上東門院のことについては、善し悪しなどを申し上げてよいことでもない。何事もすばらしい例としてはまず引かれなさる世なので、（私が）あれこれを申し上げるまでもない。何事もご幸福を極めなさるあまりに、ご寿命までも長くて、多くの天皇に先立たれなさったのが、残念です。（天皇が崩御なさる）そのたびに、たいそうしみじみとした歌を詠みなさったのは、優美です。

　一条天皇がお亡くなりになって、

　逢ふことも……＝もう逢うことも今はなく、泣いて寝た夢ではなく、いつまた（現実に）いつあなたにまた逢えるでしょうか、いや、お逢いすることはできません。

などと詠みなさっているのも、たいそうすばらしいです。

また顕基中納言（の歌）に対するご返事に、『（少しの愛でも恋しい気持ちが慰められるものならば）この世を二度も背いて剃髪することはなかっただろう』などございますのも、たいそうしみじみと心打たれる。

　どんなことよりも、すぐれた女房たちが多くお仕えしていたとかいうことが、ますます奥ゆかしくすばらしく思われます」と

言うと、「その（彰子の）御妹君の枇杷殿の皇太后と申し上げた方のところには、たいそう派手に物を選り好みした女房たちが多くお仕えしていた。大和宣旨も、その宮の女房なのだろう。（何かある）折ごとの女房の装束や、打出の衣なども、例がないほど派手にして禁制を破り、女房が一品経供養などをしたことも、たいそうはなはだしい（華美な）ものでございました。

上東門院のところには、あれほど後世に名を残した（すぐれた）女房たちがお仕えしていましたが、そのような（衣装や催しの）ことなども、『人が見て驚くほどのことはすまい』、と（彰子自身が）慎み深くなさったということは、さまざまに（女房たち）それぞれの心の様子が見えて、すばらしいです」。

第二講　演習問題(2)

〈模範解答〉

問一　ロ・ニ　**問二**　イ　**問三**　ハ　**問四**　ホ　**問五**　ロ
問六　ニ　**問七**　ホ　**問八**　出世　**問九**　ホ

〈現代語訳〉

美作守顕能のもとに、年若い僧で、入って来て経を実に尊く読む僧がいる。主人が聞いて、「何事をしなさる人か」と言う。（僧が）近く寄って言うことには、「乞食（＝托鉢）でございます。ただし、家ごとに物を求めてあちこち行くことをいたしません。西山にある寺に住んでいますが、少しお願い申し上げたいことがあって（こちらに参りました）」と言う。様子は、むやみと軽蔑することはできなかったので、（顕能は）丁寧に事情を問う。（僧は）「申し上げるにつけて、たいそうおかしなことではございますが、ある所の若い女房と深い仲になって、洗い物をさせなどしましたうちに、思ってもいないことに、（女が）身ごもって、（出産が）今月に当たっておりますが、『ひたすら自分のあやまちなので、（出産のために）特別に籠もっていますような間、彼女が命をつなぐくらいの食べ物を与えたいのです』と思いますが、どうにもこうにも、力が及びませんので、もしかしたら、哀れんでくださるでしょうかと思いまして（参りました）」と言う。事の起こりは、なるほどと思われないけれども、「そのように思っているだろう」と気の毒に思われて、「とてもたやすいことだ」と言って、一心に考えて、人一人に持たせて、添えて与えようとする。この僧が言うことには、「色々とひどく気が引けます。特に（自分の住まいが）そことは知られまいと思うのです。自分で持って行きましょう」と言って、持てるだけ背負って出た。

主人は、やはり変に思って、そのような方面についてわかっている者一人をつけてやる。（使いが）姿を目立たないようにして、見え隠れしながら行った時に、北山の奥にはるばると分け入って、人も来ない深い谷に入った。一間くらいである粗末な柴の庵の中に入って、物を並べて、「ああ苦しい。三種の宝の助けなので、安居の（間に必要な）食物も準備した」と独り言を言って、

足を洗って静かになった。この使いは、「まったくめったにないことでもあるなあ」と聞いた。日が暮れて、今晩帰ることもできないので、木陰にそっと隠れていた。夜が更ける頃に、法華経を一晩中読み申し上げる声が、とても尊くて、涙も止まらない。夜が明けるやいなや戻って、主人に、先ほどの様子を申し上げたところ、（主人は）驚きながら、「やっぱりな、ただ者ではないと思った」と言って、重ねて手紙をやる。「思ってもいないことに、安居のための物とお聞きします。そうであるならば、先日の物は少ないでしょう。これを差し上げます。さらに必要なことがありましたら、必ずおっしゃってください」と言わせたところ、（僧は）経を読んで、何とも返事をしなかった。（使いは）しばらく待ちかねて、物を庵の前に並べて帰った。

数日間経って、「それにしても、あの時の僧は不思議だなあ」と思って、訪ねたけれど、その庵には人もいなくて、前に手に入れた物を、外へ持って行ったと思われて、後の贈り物を、そのまま置いてあったので、鳥や獣が食い散らしたようで、ここあそこにこぼれ散っていた。

本当に仏道心がある人は、このように、自分の身の徳を隠そうと、非難すべき点をあらわして、尊ばれるようなことを恐れるのである。もしも、人が、出家したけれども、見事に出家したと言われるよう、尊く修行するということを聞かれようと思うと、世俗の評判（を求めること）よりもひどいことだ。このために、ある経に、「出家して名誉を求めることは、たとえば、血で血を洗うようなものだ」と説いている。もとの血は洗われて、落ちることもたやすいだろうか、知らない。新しい血は、大いに汚す。おろかなことではないか。

第三講　演習問題(3)

〈模範解答〉

問一　ハ　**問二**　ロ　**問三**　ハ　**問四**　ホ　**問五**　はなをたづねてみばや
問六　ハ　**問七**　Ｅ　ニ　Ｆ　ロ　**問八**　ロ

〈現代語訳〉

甲　上西門院兵衛の個人歌集を、ぜひ「見たい」と言うと、「それならば（貸します）」などとは言っていて、そのまま時が経つので、事情を尋ねに（使者を）やるということで（詠んだ歌）。言葉はなくて、三月下旬の頃である。

　さくら花…＝桜の花が散り浮かぶ水際に白波が立ったように、（お約束から）日数が経ったと見ることです。

　　【さうしたべ〔＝草子をお与え〔＝貸して〕ください〕】

返事。

　さくら花…＝桜の花が散り浮かぶ川の流れは白く、水に消えずに寄せる波のようだなあ。（お約束も）水に流してはいません。

　　【さうしみよ〔＝草子を見てください〕】

こうして、草子が添えられていた。

「宮内の少輔伊行といった者が、（上手な）文字を書くための方法を草子に書いて、それを『夜の鶴』と名付けて、娘である者に与えておいて死んでしまった」と大宮の加賀が語ったので、探し出して手に入れて見て、時が経ったところ、（加賀がほしいと）求めるということで（詠んだ歌）。これも春のことである。

　加賀

出でて見よ…＝外に出て見なさい。珍しく咲き出した桜の花の色が、隠れていては遠ざかって行くようです。

【いまはたべよるのつる〔＝すぐにお与えください、夜の鶴を〕】

沓冠という歌であって、遊び興じて詠んだようだ。

桜の花の頃、俊恵法師のもとから（歌が送られてきた）。

春の花…＝春の桜の花を愛でてはまたはばかることもできず、どの手もむやみに愛で、ついには折るだろうか。

【はなをたづねてみばや〔＝桜の花を探し求めて見たい〕】

返事。

今はただ…＝今はただ桜の花が咲くのを待って、寝ることもありません。（花が咲いたと）聞くのさえ愛でて、手も触れないで見ましょう。

【いざいきてたづねみむ〔＝さあ行って（花を）探し求めて見ましょう〕】

このように言ってやったので、すぐに俊恵法師が現れて、話などをする折に、（俊恵が）「故木工の頭〔＝父である源俊頼〕の歌に、『はかなしな…＝情けないことです。野の山田を耕すことができないで、手をさえもあなたはとうとう触れないのですか』（とあり、父が）このように言ったところ、返歌をしないで、故東宮の大夫〔＝藤原公実〕が使者に向かって、『さあ、それでは、花見に（行きましょう）』と言ったのは、昔の広幡の御息所が、薫物を差し上げなさったという気持ちがして、趣深くございましたと、（父は）常に語っていました。自分の歌集にも書き留めています」などと語るのは、和歌を返すべきではないと（俊恵は）思っていたようだ。どうして、必ず同じ有り様であろうか、いや、必ずしもそうではない。

乙「合せ薫物（が）少し（ほしい）」と言っている（頼み）事を、（沓冠として文字を）置いている歌。

あふさかも…＝あの逢坂の関も、夜更けになれば往来の（妨げとなる）関守もいません。やって来るなら来なさい。もし来たらあなたを帰さないよ。

【あはせたきものすこし〔＝合せ薫物（が）少し（ほしい）〕】

この歌は、仁和の天皇が、後宮の方々に差し上げなさっていたものだが、皆意味も分からず、返歌を差し上げなさっていたが、

広幡の御息所と申し上げた人が、ご返歌はなくて、薫物を差し上げましたので、（天皇はこの御息所を）風流の心があることにお思いになっていたと、語り伝えている。

第四講　演習問題(4)

〈模範解答〉

問一　エ　**問二**　ア　**問三**　エ　**問四**　オ
問五　オ　**問六**　ア　**問七**　イ　**問八**　エ

〈現代語訳〉

日が暮れたので、（鬚黒大将は）心もそわそわと落ち着かず、何とかして（玉鬘のもとへ）出かけたいとお思いになるが、雪が激しく降る。このような空模様に強いて出かけて行くようなことも、体裁が悪く、この（北の方の）ご様子も、憎らしそうに嫉妬して恨みなどなさるならば、かえって（それを）口実にして、自分も逆に腹を立て（て出て行け）るのに、大変おっとりと平静にしていらっしゃるご様子が、誠に不憫に思われるので、どのようにしようかと思い悩みながら、格子なども上げたまま、端近くでぼんやりと考えこんでいらっしゃる。北の方は（鬚黒大将の）様子を見て、「あいにくのような雪を、どのように踏み分け（てお出かけ）なさるのでしょうか。夜も更けてしまうようですよ」と促しなさる。もうおしまいだ、引き止めても（仕方がない）と、あれこれ考えていらっしゃる（北の方の）様子は、たいそう気の毒である。（鬚黒大将は）「このような雪では、どうして（出かけられるか、いや、出かけられない）」とおっしゃるけれども、「やはり（通い始めた）ここしばらくくらいは（行かないわけにはいきません）。私の気持ちもわからないで、あれこれと女房たちが取り沙汰したり、大臣たちもあれこれの噂をお耳にして何とお思いになるか心配で、（訪問が）途切れるのは気の毒だ。気持ちを落ち着けて（あなたは）やはり最後まで見ていてください。（玉鬘を）この邸になど引き取ってしまえば、気兼ねもいらないでしょう。このように普通のご様子にお見えになるときは、他の女に移る心もなくなって、（あなたを）しみじみと愛しくお思い申し上げる」などとおっしゃると、「おとどまりになっていても、お気持ちがよそにあるのなら、かえって辛いでしょう。（あなたが）よそにいらっしゃっても、せめて私のことを思い出してくださるなら、（私が嘆いて流す）袖の涙の氷もとけることでしょう」などと、穏やかにおっしゃっている。

（北の方は）香炉をお取り寄せになって、（大将の装束に）いっそう香をたきしめさせて差し上げなさる。ご自分は、着慣れて柔らかくなったお召し物を重ねた、普段着のお姿で、ますます細くか弱そうである。物思いに沈んでいらっしゃるのが、たいそう気の毒である。お目がひどく泣きはらしているのは、少し疎ましいけれど、しみじみと愛しいと見る今は、（大将も）悪気なくお思いになって、どのように過ごしてきた長い年月かと、すっかり（他の女に）心変わりしたことが（自分でも）ひどく軽薄だとはよくよく思うが、やはり（玉鬘に）よく見られたいという思いは募る一方で、偽りの嘆きをしてみせては、やはり装束を整えなさって、小さな香炉を取り寄せ、袖の中に入れて香をたきしめていらっしゃる。

詰所で供人たちの声がして、「雪が小止みになっています。夜は更けてしまうでしょうよ」などと、そうはいってもやはりあからさまにではないが、（鬚黒大将にお出かけを）促し申し上げて、咳払いをしている。中将や木工など（の女房）は、「情けない仲だこと」などと嘆きながら、話し合って横になっているが、本人〔＝北の方〕はじっと気持ちを落ち着けて、いじらしく脇息に寄り伏していらっしゃる、と見るうちに、急に起き上がって、大きな伏籠の下にあった香炉を取り寄せて、大将の後ろに近寄って、さっと灰を浴びせかけなさるときは、人々がよく見届ける間もなく、（大将は）驚きのあまり、呆然としていらっしゃる。あの細かな灰が、目にも鼻にも入って、ぼうっとして何もわからない。（灰を）払い除けなさるけれど、一面に立ち込めているので、お召し物を何枚も脱ぎ捨てなさった。正気でこのようなことをなさるのだと思うならば、二度と情けをかけることもできないほどあきれるけれど、いつものように御物の怪が、（北の方を）人に嫌わせようとしてすることなのだと、おそばにお仕えする女房たちもお気の毒に見申し上げる。大騒ぎをして、お召し物をお着替えなさりなどするけれど、たくさんの灰が、鬢のあたりにも振りかかって、どこもかしこも灰だらけという気がするので、善美を尽くしていらっしゃる（玉鬘の）お邸に、（鬚黒大将は）そのまま参上なさることはできない。乱心のせいとは言うけれども、やはりめったにない（今まで）見たことも聞いたこともないお振る舞いだと思わず（腹立たしく思って）爪弾きをし、嫌になって、（先刻の）愛しいと思った気持ちも消え失せて残っていないが、今、事を荒立ててしまったならば、大変なことになるだろうとお気持ちを静めて、夜中になってしまったけれども、僧などをお呼びになり、（物の怪退散のために）加持をして差し上げ騒ぐ。

第五講　演習問題(5)

〈模範解答〉

問一　ア　**問二**　a　**問三**　エ　**問四**　エ　**問五**　ウ　**問六**　イ

問七　栄華物語（栄花物語）　**問八**　強かりけれ　**問九**　オ　**問十**　イ

〈現代語訳〉

陰暦二月十五日は、釈迦が娑羅双樹の木の下で入滅し、荼毘にふされた日なので、あのインドから中国、日本へと渡った、生身の釈迦の姿を写したとされる清凉寺の本尊が慕わしくて、嵯峨の清凉寺に参詣して、「常在霊鷲山」などと、心の中で唱えて拝み申し上げる。側に、きっと八十歳も超えているだろうかと思われる尼が一人、鳩の杖にすがって参詣していた。しばらくして、「気丈に参詣を思い立って来たが、たいそう腰が痛くてがまんできない。今夜はこの（寺の）部屋に休もう。坊へ行ってお灯明のことなどを言いなさい」と言って、連れていた若い女房で、（お供に）似つかわしい様子の女房を（僧坊の方へ）帰したようだ。

（その尼が）「釈迦牟尼仏」と何度も申し上げて、夕日がはなやかに差し込んできたのを眺めて、「あわれにも山の端近くに傾いたような日の光だなあ。我が身の上のような気持ちがする」と言って、寄りかかっている様子は、なんとなく優雅で、情趣がわかりそうな人だよと見えるので、（私は）近くに寄って、「どこからいらっしゃいましたか。先ほどの人が戻ってくる間、お話ししようと思いますが、いかがですか」などと言うと、（尼は）「このあたりの近くですが、年をとったからでしょうか、とても遠い気がします。情けないことです」と言う。（私が）「ところで、おいくつにおなりですか」と聞くと、「さあ、自分でもよくわからないほどなのです。百歳もずっと超しているでしょう。過去も将来も、類のないような世の動乱にも、このお寺だけは無事でいらっしゃいます。やはり尊い如来様のご威光だよね」などと言うのも、古風で上品である。年齢などを聞いても、珍しい気持ちがして、こういう人こそ昔の物語もするらしいと、ふと思い出されて、心をこめて話しながら、「昔のことが聞きたくて、

年をとった方がいたらいいなあと思っておりますので、嬉しいことだよ。少しお話しください。たまたま古い歌などの書き残したものの切れ端を見るのでさえ、その昔の世に会ったような気持ちがするのですよ」と言うと、歯が抜けてすぼまった口で微笑んで、「どうしてお話し申し上げることができましょう。若かった時に見聞きしましたことは、多くの月が経つうちに、夢ほどの記憶さえもぼんやりとして、何も覚えておりません」とは言いながら、まんざらでもない、話してもよかろうと思っているようすなので、いちだんとおだてて、「あの雲林院の菩提講に参り合わせた老人の言葉（＝『大鏡』）を、仮名で書いた日本書紀だとみなしているようです。また、あの世継の孫とかいった、白髪の老女の物語（＝『今鏡』）も、世の人の愛読するものとなっていますが、（そのお方も）あなたのようなご様子の方でしたでしょう。やはりお話しください」とおだてると、それは承知しているようだが、ますます口をすぼめがちにして、「昔は人の寿命も長く、気力も強かったので、それに従って、精神もはっきりとしていて、その（＝『大鏡』や『今鏡』）ようにきちんと話もできたのでしょうか。（私のように）つまらない身は、無駄な年齢ばかりが重なっただけで、昨日今日あたりのことでさえ、目も耳もはっきりしなくなっていますので、まして（昔のことなど）とてもいいかげんな間違いだらけでございましょう。それにしてもそのようにご覧になった古い本というものはどのようなものか」と言う。

「ただ、ざっと目を通しましたのは、『水鏡』というのでしょうか。神武天皇の御代から、たいそう書いてある。その次には『大鏡』。文徳天皇の昔から、後一条天皇までございましょうか。また『世継』（＝『栄華（栄花）物語』）とかいうのは四十帖の綴じ本で、醍醐天皇から堀河先帝まで少し細かい（内容です）。また某大臣が書きなさったと聞きました『今鏡』には、後一条天皇から高倉院まで書いてあったようだ。そうそう、『いや世継』（＝現存しない）は、隆信朝臣が、後鳥羽院のご在位の頃までを書き記したと思われました。その後のことが、はっきりしなくなった。覚えていらっしゃる所々でもお話しください。今夜は（ここにいる）誰もがお話相手をしましょう。このようなお方にお会い申し上げたのも、そうなるはずの前世の因縁でありましょう」と話すと、「その昔のことはたいそうはっきりしませんが、本当に事の続きを申し上げないのも気がかりでしょうから、きれぎれに少し（お話しします）。間違いが多いだろうよ。それはお直しください。とてもお聞き苦しいことでしょうよ。あれらの古い書物と、同列にはお考えにならないでください」と言って、

おろかなる…＝これから話す物語は古い物語には及びもつかないので、よく澄んだ鏡にものが映るように私の愚かな心が見

えてしまうことでしょう。

と、声をふるわせて詠み上げたのも奥ゆかしく、まことに古風である。「それならば、これからおっしゃることもまた書き記して、あの昔の（大鏡の）姿と同じようになさろうとお思いですね」と答えて、

今もまた…＝今もまた昔のことを書き記すとよく澄んだ鏡にものが映るように、過ぎ去ってきた代々のことがはっきり映るから、これを『増鏡』と名付けて（歴史物語の）あとに重ねよう。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。